

| | |
|-------------|---|
| Title | 実体二元論との対決(1) : 主体について |
| Author(s) | 坂井, 賢太郎 |
| Citation | 京都大学文学部哲学研究室紀要 : Prospectus (2010), 13: 83-95 |
| Issue Date | 2010-03 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/137547 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

実体二元論との対決①

—主体について—

坂井賢太朗

0. はじめに

本稿では、主に主体に注目して Richard Swinburne の実体二元論をまとめ、それが支持されるとする議論を紹介する。そして、彼の議論に批判を加え、物理主義的な理論を対案として提案し、物理主義が実体二元論より優位であるとする議論を試みたい。

1. Swinburne のソフトな実体二元論

Swinburne の支持するソフトな実体二元論 (soft substance dualism) を概説する。まず、議論に用いられるテクニカルタームとその訳語を導入する。

彼は心的生活を持つものを主体 (subject) とする。そして、世界の構成要素であり、他の構成要素と因果的に相互作用を持ち、時間を通じてある歴史を持つものを実体 (substance) と考える。また、物的対象 (material object) は空間的位置を占める実体であり、心的対象 (mental object) は空間的位置を持たない実体である。また、物理的性質 (physical property) は公的なもの (public) であり、物理的出来事 (physical event) は物理的性質の例化 (性質が具体化されること) にかかるものである。他方、心的性質 (mental property) はある一つの主体が特権的なアクセス (privileged access) を持つ、すなわち必然的に他の誰よりその心的性質をよく知る立場にあるようなものである。そして、心的出来事 (mental event) は心的性質の例化にかかるものである。

次に、心身問題に関わる立場の中で Swinburne が主なものとみなす三つの立場を説明する。

i) ハードな唯物論

物的な対象のみが実体であるとする立場である。この立場では、この世界で起こる出来事は物理的出来事のみである。心的出来事を脳内の神経発火という出来事に還元するのが心-脳同一説 (Mind-Brain Identity Theory) であり、表出する行為に還元するのが行動主義 (Behaviorisms) である。Swinburne はハードな唯物論として以上二つをあげるが、本稿では心的出来事、すなわち心的性質の例化は物理的性質の例化であるとする Sydney Shoemaker の「物理的実現説」をこれに加え、私はこの立場を取る。「物理的実現説」は第

4節で詳しく説明する。

ii) ソフトな唯物論

物的な対象のみが実体であるとすることは認めるが、物的性質と区別できるものとして心的性質を考える立場である。これはときに「性質二元論」と呼ばれる。

iii) ソフトな二元論

Swinburne の取る実体二元論は、地球上で生きている人類 (human beings) であるような人間は一つにつながれた二つの部分、身体と魂を持つというものである。人が持つ物理的性質 (石 10 個分の重さであるなど) はその身体に属し、(純粋な) 心的性質 (猫を表象するなど) はその魂に属す。他にも、手紙を書くといった混合された心的性質 (mixed mental property) というものが存在するが、それは手紙を書くかと思うという心的性質の例化と筆を走らせるという物理的性質の例化に分析可能である。人が性質を持つということはその構成要素がその性質を持つということであり、従ってこれら三種の性質を人は持つことができる。そして、彼は人間がその身体を破壊されても生き続けることは論理的には可能であるが、現世の普通の状況のもとでは、魂が機能することは身体が機能することを必要とする。それゆえ、デカルトに代表される、心 (魂) と身体が全く別個のものであり、「自力で」存在しつづけるとする立場と区別して彼は自身の立場をソフトな二元論と呼ぶ。

最後に、彼が導入する四つの帰納的推論における原則を導入する。

i) 軽信の原理 (Principle of Credulity)

私たちは反証する証拠が無い限り、認識的な意味において、物事はそうであると思われるところのものであると信じるべきであるという原則である。

ii) 証言の原理 (Principle of Testimony)

他者が物事はどのようなものであると思われたかという報告を私たちは信じるべきであるという原則である。これは、軽信の原理と合わせれば、物事は彼らが報告するとおりであるとすることができ、私たちに探求のための膨大なデータベースを提供してくれる。

iii) 単純性の原理 (Principle of Simplicity)

以上のように与えられたデータから、私たちは与えられたデータと両立可能な無限の理論を作ることができる。このような理論から一つを選ぶ際に、それを決定するのがこの原理である。すなわち、最も単純な理論を最も真でありそうなものとして採用するのである。そして、この最も単純な理論が与える説明が、データを説明するのに「最もよい」説明なのである。この原則は、軽信の原理における「反証する証拠」が何であるかを示している。すなわち、ある対象が楕円に見えたとき、軽信の原理よりそれは楕円である。

しかし、別のいくつかの視点から見るとそれは円であり私はそれを円であると信じるようになる。このとき、私たちはその対象が頻繁に形を変えると考えるより、同じ形を保っていると考えるほうが単純である。従って、私の信念は、実際その対象は円であるが、ある視点から見ると楕円に見えると修正される。

iv) 思いやりの原理 (Principle of Charity)

私たちが他者の心的生活を理解しようと試みる際、私である以外のことは同じであるので他者は私たちと似たものだと思うという原則である。

本稿の最後で、この四つのうち第三の「単純性の原理」を用いる。

2. Swinburne の二つの思考実験と一つのモデル

Swinburne は Swinburne(1986)の第 8 章において人が心的生活を持つことはその人の非身体的な部分、すなわちその魂が心的生活を持つことだということを示す。これは「狂った外科医」、「少しずつの身体交換」の二つの思考実験から導き出され、それを踏まえた人間が存在し続けることのモデルが提案される。

2.1 狂った外科医

一つ目の思考実験は、人間の身体とその部分に何が起きるかという知識と人間の身体との連関において起こる心的出来事は、人間に何が起きるかという知識を与えるのに十分ではないということを示すものである。

私の身体から腕や脚を切り離してもその切り離されたほうの身体は私のものであるだろう。しかし、脳を切り離されたらもはやそれは私の身体ではない。私たちは脳をその身体がだれの身体であるかを決定する核だとみなしている。では、その一部だけが除去されるとどうなるのだろうか。いつか、ある人間Pを殺すことなく脳半球の全摘移植手術が可能になったとしよう。このとき、 P_1 にその手術を行い、その右脳と左脳をそれぞれ脳が摘出されたばかりの身体 $P_{2,1}$ と $P_{2,2}$ に移植し、成功したとすると、移植された身体 $P_{2,1}$ と $P_{2,2}$ においてそれぞれ P_1 の特徴を備えた二人の生きた人間がいるように見えるだろう。このとき、その $P_{2,1}$ と $P_{2,2}$ はいずれかが P_1 と同一である。しかし、 $P_{2,1}$ と $P_{2,2}$ は同一ではない。なぜなら、 $P_{2,1}$ と $P_{2,2}$ は全く異なった心的生活を持っていると思われるからである。従って、その手術は少なくとも一人の新しい人間を作ることになる。そのどちらが P_1 と同一となるかはいかに P_1 が脳神経科学を知っていようとも分からない。Swinburneが考えるこの思考実験のポイントは、人間はこの手術でいかにその身体の部分に起こることを知っていようとも、それ自身に何が起こるのかは分からないであろう、ということである。

ここで提起されるのが Bernard Williams が提案した「狂った外科医」の思考実験である。あなたは狂った外科医に捕らえられ、その外科医はあなたの右脳と左脳を別々の身体に移植すると告げる。そして、彼は片方を拷問にかけ、もう片方には 100 万ポンドを与えて自由にするつもりだという。あなたはいずれの身体が拷問にかけられ、いずれの身体が報酬を得るかを選ぶことができ、その外科医はあなたの選択に従うと約束してくれる。あなたは報酬を得るほうがあなたであるような選択をしたいだろう。しかし、あなたはどちらの身体があなたになるかは分からない。あなたはどのようにして選択すればいいだろうか。

これが、「狂った外科医」の思考実験である。あなたはあなたの身体に起こることを知っており、あなたの左右の脳が移植された身体に何が起こるかも知っている。あなたは左右どちらかの脳を移植された方になるだろう。あなたは左脳が移植された身体で生き残るとしよう。このとき、右脳が移植された方の身体は、私から切り離された腕や脚と同様、私と関係が無い。それゆえ、人間にとって身体とその部分に何が起きるかという知識とその身体との連関において起こる心的出来事はそれ自身に何が起きるかという知識を与えるのに十分であるならば、あなたはあなたである方の身体が報酬を得るように選択できる。しかし、あなたは選択することができないだろう。従って、あなたの身体に起こることを知ることは、あなたという人間に何が起こるか知るために十分ではない。ここから、人間について語ることは身体とその部分について語ることによって分析できず、人間の同一性を決定する何かそれ以上のもの (something over and above) があるという結論を Swinburne は引き出す。しかし、この思考実験はある身体的なものが人間の同一性にとって「同様に」必要であるという可能性を排除しない。それを排除するのが次の「少しずつの身体交換」の思考実験である。

2.2 少しずつの身体交換

二つめの思考実験は人間がその身体が破壊されても存在し続けるということを示す。まず、Swinburne は心的生活を持つ主体がその身体を失ってもその心的生活を持ち続けることは首尾一貫していると主張する。そして、そこから人が新しい身体を持つことはもっともらしいと語る。これを、理解するのが困難な人のために彼が提起するのが「少しずつの身体交換」である。

ある人が朝起きると身体の右半分が動かせなくなっていることに気づいたとせよ。彼が身体の右半分を動かそうとすると、彼の身体の対応する左半分が動くのだ。そして、彼が身体の左半分を動かそうとすると彼の妻の身体の対応する右半分が動く。そして、外界からの刺激も同様に彼の身体の左半分と彼の妻の右半分に与えられた刺激によって与えられ

る。このとき、彼の身体のコントロールと外界から受ける刺激の中心（すなわち、彼の意識の中心とでも呼ぶべきもの）はシフトしている。そして、彼の身体のコントロールと外界から受ける刺激の中心は、徐々に妻のそれにシフトしていくということも想像可能かもしれない。そして、Swinburne は同様に筋が通ったこと（*equally coherent*）として次のような思考実験を提案する。彼にとって人間が身体を持つのは、それを通して行為を行い世界について知るような、ある特定の物質群を持つときである。しかし、これは主体が身体を持つことを必要としない。例えば次のような場合を考えよ。あるときある人間がある部屋の中の物の位置についての知識を持つことに気づいたとしよう。そして、彼はそのものの位置を私たちが手や足の位置を知るようにして知ることができ、それを私たちが手や足を動かすように動かすことができるのだ。しかし、ここから彼の身体がこの部屋であるとはいえない。なぜなら、私たちは彼の世界からの刺激と世界へのコントロールの中心が徐々に隣の部屋へと移っていくということも考えられるからである。

この二つの思考実験は、前者がある人間がある身体を動かし、それを通して知ることが特定の身体に制限されていないことの思考可能性を示し、後者はこれが人間の身体である必要すらないということを示す。ここから、人間が身体を持たなくても存在し続けることは筋が通ったことだと Swinburne は論じる。

2.3 擬アリストテレス想定

以上で Swinburne は物質の連続は人間が存在し続けることにとって（論理的に）必然ではなく、何かそれ以上のものが存在することを論じた。そして、さらに彼は人間が身体を持たないことは論理的に必然ではないばかりではなく、自然法則によっても必然化されないと語る。それは次の部分で端的に表される。

自然法則が未だ全く決定していないことは、どの生きた身体があなたのものであり、どの生きた身体が私のものであるかということである。全く同じ物質の配列で、全く同じ法則でも、今のあなたのものである身体が（そして、その行動も心的生活も）私のものであったということも、そして私のものである身体が（そして、その行動も心的生活も）あなたのものであったということも可能だったのである。人間に身体を割りあてるには神か偶然のいずれかが必要である。自然法則が決定できた最大のものはある構成の身体がある人間または別の人間の身体であるということである。そして、その人間はその構成の結果としてある仕方で振舞い、心的生活を持つ。今あなたのものである身体が私のものであったかもしれないゆえに（論理も自然法則さえもこれを

許す)、それは私の身体を構成するいかなる物質も私が今この人間であることにとって本質的ではないのである。(ibid., pp.152-153)

しかし、人間は実体である。実体が存在し続けることにとって、何らかのものの連続が必要である。例えば、机はそれを構成する全ての木が別のものに取り替えられてしまったら、もはやもとの机ではないだろう。他方、植物のような有機体ではそれを構成する物質全てが交換されてしまうことが許されるだろう。ただし、その交換が徐々に行われる場合のみである。ものの連続がある実体が存在し続けることにとって必要であるということはアリストテレスの実体の説明の要点であった。しかし、Swinburne は身体の連続は人間が存在し続けることにとって必要ではないことを示した。ここで、アリストテレスの実体に関する説明を採用するために彼はアリストテレスの実体の説明を緩める (liberalize)。すなわち、普通は実体を構成する素材 (stuff) は単に物質だけである。しかし、ある実体 (例えば人間) は部分的に非物質的な素材、すなわち魂-素材で構成されるとするのである。そして、人間は分割不可能であるゆえに魂-素材は分割不可能であり、それを私たちは魂と呼ぶのである。これを Swinburne は擬アリストテレス想定 (quasi Aristotelian assumption) と呼ぶ。

3. Swinburne の二つの思考実験批判

以上見たとおり、Swinburne は「狂った外科医」の思考実験より人間にとって身体が本質的でないことを示し、「少しずつの身体交換」の思考実験から人間の身体からの分離可能性を引き出している。しかし、この思考実験はそれぞれ問題を抱えている。

3.1 「狂った外科医」批判

この思考実験はまとめると次のように議論が進む。

前提0 (背理法の仮定) : 身体とその部分に何が起きるかというとその身体との連関において起こる心的出来事を知っているならば、人間に何が起きるかということを知ることができる。

$$\{K(B) \wedge K(M_B)\} \rightarrow K(P) \cdots \textcircled{1}$$

前提1 : 脳は分割され、別々の身体に移植されて片方は拷問を受け、片方は報酬を受ける。

そして、両方が生存した場合、拷問あるいは報酬を受けるとどのような心的出来事が起こるか知っている。右脳を B_R 、左脳を B_L とし、右脳を移植されてできた人間

を P_R 、左脳を移植されてできた人間を P_L とする。

$$K(B_R) \wedge K(M_{BR}) \text{かつ} K(B_L) \wedge K(M_{BL}) \cdots \textcircled{2}$$

そして①ゆえに

$$\{K(B_R) \wedge K(M_{BR})\} \rightarrow K(P_R) \text{ かつ } \{K(B_L) \wedge K(M_{BL})\} \rightarrow K(P_L) \cdots \textcircled{3}$$

前提2：あなたは P_R か P_L のいずれかだ。

$$P = P_R \text{ または } P = P_L \cdots \textcircled{4}$$

前提3：あなたが P_R ならば P_L のことは知らず、あなたが P_L ならば P_R のことは知らない。

$$\{P = P_R \rightarrow \neg K(P_L)\} \wedge \{P = P_L \rightarrow \neg K(P_R)\} \cdots \textcircled{5}$$

②、③ゆえに $K(P_R)$ かつ $K(P_L)$ …⑥。④、⑤ゆえに $\neg\{K(P_R) \wedge K(P_L)\}$ ⁽¹⁾…⑦。⑥、⑦ゆえに矛盾。

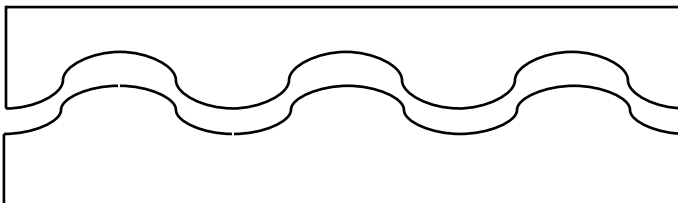
従って、背理法より $\neg\{K(B) \wedge K(M_B) \rightarrow K(P)\}$

すなわち身体とそれに連関する心的出来事を知っていても人間に何が起きるか分からない。

このまとめが正しいとすると、次のように反論可能である。すなわち、背理法の仮定を前提0の①以外にすればよい。すなわち、①を自明としてみる。このとき、前提1の②は思考実験の設定であるので否定する必要はないように思われる。③は①に依存しているため、①を否定しないならば否定されない。また、⑤も分割された脳を持つもう一方に起こったことを知ることはできないと思われるので否定しづらい。それを認めることは、物理的に離れた脳からの刺激を受け取ることができるという点で念力を認めるに等しい。従って、前提2の④を否定するしかない。すなわち、 P_R と P_L はどれほど意識を持っているように見えて、事実意識を持っていたとしても、いずれも P ではないのだ。これがどのような意味を持つか第4節で詳しく論じる。

3.2 「少しずつの身体交換」批判

Swinburne は身体から心的生活への因果を認める。彼は「アナロジー」としながらも以下のような形で脳が魂に影響を与えると語る(ibid., p. 291, Fig. 3)。



魂においてある信念と欲求の表象と脳のある信念と欲求に対応する電気化学的なネットワークがありそれらがぴったりと重なるということをこの図は表現している。魂はやわらかいクッションのように脳状態の形によって決定される⁽²⁾。

以上のことを確認して「少しずつの身体交換」を検討していこう。最初の身体の右半分のコントロールと刺激の受容が左半分に移り、左半分のコントロールと刺激の受容が妻の右半分に移った人間を考える。彼を P とよび彼の妻を W と呼ぼう。このとき、単純な身体のコントロールと刺激の受容がそれぞれの身体で行われるということは想像可能である。しかし、想像可能なのはここまでである。問題が起こると思われるのは次の点である。すなわち知覚の統合の問題である。例えば、彼（ら）の視覚はどのようになっているだろうか。人間は両眼で受けた刺激をそれぞれの脳半球に送り、それらが統合されることによって一つの視覚像を得ていると考えられている。この統合が可能なのは、それぞれの脳半球が相互に連絡を持っているからである。しかし、P の場合、妻の左眼で受けて P が持つとされる刺激は P の右目で受けた刺激と統合されない。脳梁のみならず、間脳、視床にいたるまで物理的に全く「切断」されているため、脳内では統合されないと考えるのが自然だろう。このとき、視覚像は魂において一つにされるのだろうか、それとも P は二つの視覚像を持つのだろうか。前者だと考えると、聴覚像も同様に魂において一つにされているのだろうか。そもそも魂における知覚処理はこの「統合」だけなのであろうか。そう考えるのはあまりにも ad hoc であろう。では、後者だと考えるとどうだろう。こちらの方がより深刻である。すなわち、そもそも知覚が統合されないということは、脳の状態にかかる心的出来事も全く別個のものとして存在することになってしまうからである。例えば P は戦場に行き、W は家庭で彼の帰りを待つといった場合、彼（ら）の心的生活はどのようなものになるのだろうか。私には全く想像がつかない。従って、私にはこの思考実験の妥当性は全く認められない。

4. 物理主義的実現説

第3節までで Swinburne の考える実体二元論の紹介とそれへの批判を展開した。すなわち、Swinburne の提起する思考実験からでは、人間にとって身体が本質的でないことも人間の身体からの分離可能性をも引き出せないことを私は示した。本節では、Swinburne の提示する心的出来事の主体が物理的に実現可能であるとするモデルを提案する。そして、もしそれが正しいなら、それは物理的に観察可能なものから主体を構成するゆえ、物理的な観察には現れない「魂」という存在者を措定しない点でより単純であり、Swinburne 自身が立てた「単純性の原則」より、私たちはそれをよりよい理論として選ぶことができる。

4.1 心的性質の物理的実現

ここで、実体二元論と対立する立場として物理主義を取る。とりわけ、Sydney Shoemakerの「物理的実現説」を用いて、Swinburneの実体二元論と対決する。Shoemaker(2007)は、物理主義が真であるならば心的性質を含むすべての性質は物理的に実現される、と論じる。まず、目に見えるものの性質例化について考えてみよう。例えば、「白い」という性質である。これは物理的に説明されているように、ある波長の光を反射するという性質をその性質を持つ対象が例化しているからであり、その性質は微小物理的な状況 (microphysical state of affair) が実現する性質によって構成されていると考えることができる。このような性質を MSE 性質 (microphysical-state-of-affairs-embedding property) と呼ぼう。そして、物理主義が真であるならば、目に見えない性質も同様に MSE 性質によって構成されていると考えることができる。ここで、持ち上がる一つの問題が多重実現の問題である。例えばある心的性質が異なる物理的性質によって実現されるとき、それらは同じ心的性質とみなすことはできない。逆に、それらを同じ心的性質とみなすならば心的性質は MSE 性質によっては実現されない。このことは性質一般がその因果的特徴 (causal profile) によって特定化されると考えれば回避できる。すなわち、例えば痛みを持つという性質について、私たちは、痛みを細胞の損傷によって引き起こされ、回避行動を取る、「痛い」と言うなどなどの行動を引き起こすものとして特定化すれば、それがいかなる微小物理的な状況によって例化されていようとも「痛み」の例化であると考えることができる。

このように、心的性質を含む性質一般はそれを機能的特徴によって特定化することで物理的に実現可能であると考えることができる。ここで注意しなくてはいけないことは、すべての性質の本質が機能的性質であると Shoemaker は主張しているのではないということである。Jaegwon Kim は例えばクオリアを持つことのような心的性質はその本質として因果的特徴を持たないため、機能化不可能であり物理的に還元可能ではない、すなわち物理的に実現できないと考える。しかし、これは機能的性質を性質一般の本質だとみなすことから生じた誤解である。本質ではないとしてもクオリアは機能的特徴を持つ。それは例えば識別、認知などの中で経験の類似性や差異性を示すという形で因果的力を持つことから言えるだろう。従って、クオリアも物理的に実現可能である。

4.2 主体の物理的実現

以上、見てきたように心的性質も含めた性質一般は物理的に実現可能である。ここから私は一歩進んで、その心的性質を持つところの主体も物理的に実現可能であると考えられる。

ここで、同じ Shoemaker の「人格の同一性」の理論を参考にしてこの点を考えていきたい。

彼の人格の同一性理論は「心理的連続性説（以下MC）」である。MCは人格の同一性が成り立つ条件として次のように考える。すなわち、時点 t_1 における人間 P_1 の行ったことの記憶、意志、信念などの心的状態（すなわち心的性質を持つこと）が時点 t_2 における人間 P_2 の心的状態と何らかの関係にあるとき心理的連関（psychological connectedness）があるといい、これが連鎖していることを心理的連続（psychological continuity）があるという。そして時点 t_1 における人間 P_1 と時点 t_2 における人間 P_2 の人格の同一性が成り立つのはこの心理的連続があるときであり、かつそのときに限るとする。Shoemakerはこの心的状態を機能的状態と考え、それらの関係を因果関係と考える。そして、これらの機能的状態を実現するには何らかのシステムが必要だと考える。ここで言うシステムとは、機能的状態を特定化するための機能的役割を実行可能なものである。例えば「ブレーキである」という機能的状態は「起動させれば車輪（あるいはそれに類するもの）の速度を緩める」という機能的役割によって特定化される。このとき、この機能的役割を実行可能な構造体がシステムである。心理的連続を因果的連続だと考えるShoemakerの心的連続性説（以下MCS）をまとめるとこうなる。

(MCS) 時点 t_1 における人間 P_1 と時点 t_2 における人間 P_2 の人格の同一性が成り立つのは P_1 があるシステムのもとで心的状態を実現し、 P_2 もあるシステムのもとで心的状態を実現し、この二つの心的状態が因果的に心理的連関あるいは心理的連続関係にあるときかつそのときのみである。

人格の連続性が意識の連続性を含意すると仮定すると少なくとも部分的には MCS は次のように言い換えることができるだろう。

(MCSC) 時点 t_1 における人間 P_1 と時点 t_2 における人間 P_2 の意識が連続しているのは P_1 があるシステムのもとで心的状態を実現し、 P_2 もあるシステムのもとで心的状態を実現し、この二つの心的状態が因果的に心理的連関あるいは心理的連続関係にあるときである。

MCSC の C は意識（consciousness）の C である。この上で、私はその「心的性質を持つ」主体を次のように定義したい。

(Sub) あるシステムSの中で、時点 t_1 においてある心的性質 M_1 が例化され、時点 t_2 においてある心的性質 M_2 が例化され、この二つの心的状態が因果的に心的連関あるいは心的連続関係にあるとき意識の連続が存在する。そして、その意識の連続が存在するときに限り、 M_1 と M_2 の「担い手」として存在するものが主体である。

ここで、担い手をカッコ付きにし、存在に傍点を振ったのは、この私の言う主体が Swinburne の言う意味で実体ではないからである。物理主義が真であるならば、世界の構成要素は物理的な対象のみである。例化される性質は物理的な対象と因果関係を持ちうるがそれ自体物理的な対象でないため世界の構成要素ではない。さらに私の言う「主体」はその例化される性質から実現されるものであるため、直接に物理的対象と因果関係を持たない。このため、「主体」は実体ではない。しかし、ここまでの議論において主体が実体でないからといってどのような不都合が生じるだろうか。不都合どころか、私の理論では Swinburne が心的性質の特徴として挙げた「特権的アクセス」が説明できる。すなわち、心的性質がそれを持つ主体にとって特権的なアクセスがあるのは、まさにあるシステムの中において生じる心的性質によって構成されるのがその主体であるからである。また、それは Swinburne の二つの思考実験にも次のように説明を与えることができる。「狂った外科医」においては第3節の批判で示したように彼の前提を全て受け入れた上で、背理法の仮定を前提2「あなたは P_R か P_L のいずれかだ」とすることができる。このとき、背理法より、前提2の否定、すなわち「あなたは P_R か P_L のいずれでもない」が得られる。これは私の主張と両立可能である。すなわち、あなたは、 P が持つシステムによって実現された主体であるため、 P_R か P_L のいずれでもない。そして、 P_R と P_L は別々のシステムとしてそれぞれ主体を実現するため、同一時点に異なるが同一な人間が存在するという論理的な不整合も発生しない。また、「少しずつの身体交換」が成り立たないことも示せる。すなわち、 P の脳の左半分と W の脳の右半分は連絡がない別々のシステムであるため、一つの主体を実現させることはありえない。

さらにこの説明では、Swinburne が実体二元論を支持する理由を述べた部分（2.3節で引用した部分）で表された疑問を解消することができる。彼は暗に自然法則に従って身体が構成され、そこに主体が宿るという順番で身体と主体の関係を考えている。このため、私という主体の身体があなたのものでありうるしその逆も可能であるという考えが生まれてくるのだ。しかし、逆に考えると神も奇跡的な偶然も必要ない。すなわち、自然法則に従って構成された身体というシステムから私という主体が構成されるのであり、それゆえ必然的に私の身体は私のものなのである。そして、最も重要なことは、心的状態が物理的に

実現可能であるゆえ、主体も物理的に実現可能なのである。

4.3 単純性の原理からの比較

ここで、Swinburne の「ソフトな実体二元論」と私と Shoemaker の「ハードな唯物論」のいずれが正しいのであろうか。ここで、私が用いたのが Swinburne 自身が正しい理論を選び取る原則として提案した「単純性の原理」からの比較である。本稿の範囲では、主体あるいは人間であることの条件に関して Swinburne は実体二元論を取って説明し、私と Shoemaker は物理主義を取って説明した。ここで、物理的対象+魂を使って説明する Swinburne より物理的対象のみで説明する私と Shoemaker の方がより単純であろう。また、私たちは、擬アリストテレス想定を使わずとも、私たちの理論では物理的システムの連続性は主体の連続性を含意するため、アリストテレスの用いなかった魂-素材というものを使わずに主体の連続性を説明できる点でより単純である。ここから、私と Shoemaker の理論の方がよりよい理論である。

5. まとめ

本稿では、主に主体という観点から Swinburne の実体二元論を支持する議論をまとめ、それを批判し、より単純な物理主義の立場を提案することで物理主義の優位を示すことを試みた。実体二元論と物理主義の一元論をめぐる議論は心身問題、自由意志の問題など他にも多岐にわたる。それらの問題には稿をあらためて取り組み、最終的には全ての面において物理主義が優位であることを示していきたい。

文献

Kim, J. (2006). *Philosophy of Mind*, Westview Press.

Shoemaker, S. (1963). *Self-Knowledge and Self-Identity*, Cornell University Press. [『自己知と自己同一性』管豊彦・浜渦辰二訳, 勁草書房, 1989.]

—— (2007). *Physical Realization*, Oxford University Press.

Shoemaker, S. & Swinburne, R. (1984). *Personal Identity*, Basil Blackwell. [『人格の同一性』, 寺中平治訳, 産業図書, 1986.]

Swinburne, R. (1986). *The Evolution of the Soul*, Oxford University Press.

註

$$\begin{aligned}
 & (1) (P=P_R \vee P=P_L) \wedge [\{P=P_R \rightarrow \neg K(P_L)\} \wedge \{P=P_L \rightarrow \neg K(P_R)\}] \\
 & \Leftrightarrow [\{P=P_R \wedge \{P=P_R \rightarrow \neg K(P_L)\}\} \vee \{P=P_L \wedge \{P=P_R \rightarrow \neg K(P_L)\}\}] \wedge \{P=P_L \rightarrow \neg K(P_R)\} \\
 & \Leftrightarrow [\neg K(P_L) \vee \{P=P_L \wedge \{P=P_R \rightarrow \neg K(P_L)\}\}] \wedge \{P=P_L \rightarrow \neg K(P_R)\} \\
 & \Leftrightarrow [\neg K(P_L) \wedge \{P=P_L \rightarrow \neg K(P_R)\}] \vee [\{P=P_L \wedge \{P=P_R \rightarrow \neg K(P_L)\}\} \wedge \{P=P_L \rightarrow \neg K(P_R)\}] \\
 & \Leftrightarrow [\neg K(P_L) \wedge \{P=P_L \rightarrow \neg K(P_R)\}] \vee [\neg K(P_R) \wedge \{P=P_R \rightarrow \neg K(P_L)\}] \\
 & \Leftrightarrow \neg K(P_L) \vee \neg K(P_R) \quad \text{⑤より} \\
 & \Leftrightarrow \neg \{K(P_L) \wedge K(P_R)\}
 \end{aligned}$$

② しかし、魂の構造の「中心」にあるような信念や欲求はこの脳からの影響を拒むことがある。詳細な議論はSwinburne(ibid., ch.14)を参照されたい。

[京都大学大学院修士課程・哲学]